

# 第2話 関東管領と永享の乱

東国を治めるために置いた鎌倉の関東管領が、勢力を得るにつれて京都の本家を軽んじて、事毎に幕府に反対するようになる。終いに、ここでも足利氏に付き物の内輪喧嘩を始めて、やがて関東管領家は亡びる。

第101代 称光天皇の応永30年3月、義持は將軍職を子の義量に譲り、出家して名を道詮と改めた。

この時、義量は17才の少年でしたが、もともと大酒飲みでしたので、父の義持は大いに心配して、しばしばこれを諫めたにも拘らず、その2年後の応永32年正月、酒を飲み過ぎたのが体に障って病気となり、遂にその2月27日に死んだ。年は僅かに19才でした。後を継ぐべき子が無かったので、義持は再び政治を執っていたが、彼もまたその3年後に43才で亡くなった。

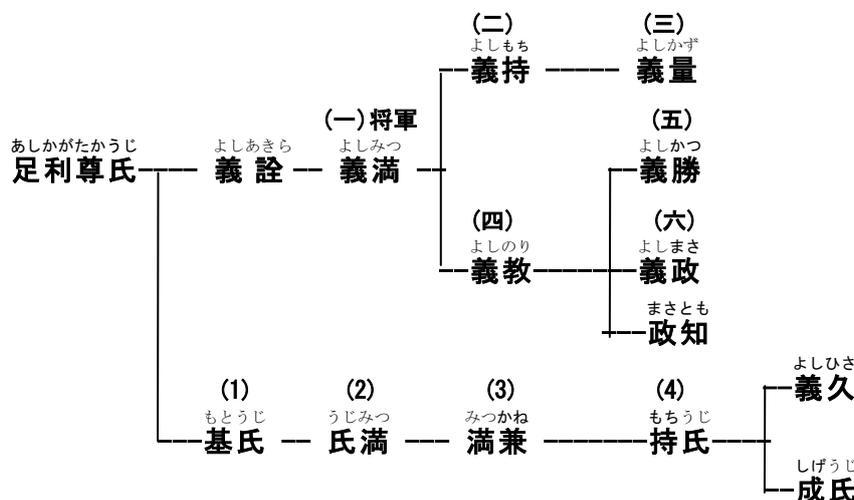
あしかがよしのり  
足利義教

義持にも義量の外には子が無かったので、いよいよ彼の病気の治らない事が分かると、管領の畠山満家の意見も聞いた上で、義持の弟で坊さんになっている4人の中から、六條八幡の神前でお御籤を引いて跡継ぎを定めることにした。お御籤は義持の死んだ後に開かれたが、弟の義円がこれに当たったので、即ちこれを還俗させて後を継がせた。第4代將軍の義教がこれで、義教は義円が還俗して改めた名です。



あしかがよしのり  
足利義教

ところが、時の関東管領の持氏は、義教が將軍になった事に対して頗る不平でしたので、これより事毎に義教に反抗した。ついにその10年の後には永享の乱という騒ぎまで惹き起して、わが身を亡ぼし、その家をも亡ぼすようなことになりましたが、それを説くには先づ関東管領家の起りから述べるのが便宜です。



かんとうかんれい  
関東管領

そもそも関東管領家は尊氏の子の基氏に始まり、父子相伝えて4代、持氏は基氏の曾孫に当たります。

## 第2話 関東管領と永享の乱

初め、<sup>たかうじ</sup>尊氏が<sup>よ</sup>鎌倉に<sup>むほん</sup>抛って<sup>くわだ</sup>謀反を企て、<sup>かんぐん</sup>箱根、<sup>やぶ</sup>竹の下の戦いに<sup>よし</sup>官軍を破って<sup>よし</sup>京都に向った時に、彼は子の<sup>よし</sup>義詮を<sup>あきら</sup>鎌倉に<sup>とど</sup>留めて行った。これは、この地が<sup>よりとも</sup>頼朝以来、<sup>あ</sup>長らく<sup>と</sup>幕府の在った<sup>ぶ</sup>処で、<sup>てん</sup>武家が<sup>か</sup>天下に<sup>ごうれい</sup>号令するの<sup>も</sup>に<sup>つごう</sup>最も<sup>ぜんこく</sup>都合がよかつたので、<sup>へいてい</sup>やがて<sup>ひら</sup>自分も<sup>つも</sup>全国を平定したら、ここに<sup>つ</sup>幕府を開く<sup>つ</sup>積り<sup>つ</sup>だったからです。

### あしかがもとうじ 足利基氏

ところが、延元3年8月、<sup>たかうじ</sup>尊氏が<sup>こうみょういん</sup>光明院をお立てして<sup>いわゆる</sup>所謂<sup>せいじ</sup>北朝を開き、<sup>と</sup>ほしいままに<sup>せいじ</sup>天下の政治を執ることになると、<sup>せいとう</sup>間もなく<sup>せいとう</sup>正統の朝廷が<sup>かいふく</sup>吉野に開かれて、<sup>かいふく</sup>官軍は常に<sup>かいふく</sup>京都を回復しようとしていたので、彼は<sup>はな</sup>京都を離れることが出来なくなって、ついに、<sup>よ</sup>よんどころなく<sup>よ</sup>幕府を<sup>よ</sup>京都に開いたのです。それで、<sup>よしあきら</sup>鎌倉はそのま<sup>よ</sup>ま子の<sup>よしあきら</sup>義詮に<sup>ごむらかみ</sup>守らせていたが、その後、<sup>よしあきら</sup>後村上天皇の<sup>め</sup>正平4年、<sup>かえ</sup>義詮を<sup>た</sup>京都に<sup>た</sup>召し<sup>た</sup>還して、<sup>よし</sup>弟の<sup>よし</sup>直義に<sup>よし</sup>代わらせた時に、<sup>たかうじ</sup>尊氏の<sup>まつし</sup>末子の<sup>もとうじ</sup>基氏を<sup>しつじ</sup>関東管領とし、<sup>うえすぎ</sup>その<sup>い</sup>執事の上<sup>し</sup>杉氏と<sup>し</sup>共に<sup>し</sup>鎌倉に<sup>し</sup>居させて、<sup>し</sup>子孫<sup>し</sup>相<sup>し</sup>ついで<sup>し</sup>東国を<sup>し</sup>治め<sup>し</sup>させることにしました。これが<sup>お</sup>関東管領家の<sup>お</sup>起こりです。

### うじみつ やしん 関東の足利氏満の野心

<sup>もとうじ</sup>足利<sup>ちゆうじつ</sup>基氏は<sup>しよく</sup>忠<sup>つと</sup>実にその<sup>ごむらかみ</sup>職を<sup>よしあきら</sup>勤めて、<sup>よしあきら</sup>後村上天皇の<sup>よしあきら</sup>正平22年の、<sup>よしあきら</sup>義詮が<sup>よしあきら</sup>京都で<sup>よしあきら</sup>亡くなった年に28才で<sup>よしあきら</sup>亡くなったが、その後、その後を<sup>うじみつ</sup>9才で<sup>よしあきら</sup>継いだ子の<sup>よしあきら</sup>氏満が<sup>よしあきら</sup>壮年になった頃は、<sup>よしあきら</sup>ちょうど<sup>よしあきら</sup>京都の<sup>よしあきら</sup>義満が<sup>よしあきら</sup>奢り<sup>よしあきら</sup>を<sup>よしあきら</sup>極め、<sup>よしあきら</sup>贅沢の<sup>よしあきら</sup>限りをつ<sup>よしあきら</sup>くして、<sup>よしあきら</sup>諸国の<sup>よしあきら</sup>人々の<sup>よしあきら</sup>苦しみを<sup>よしあきら</sup>顧<sup>よしあきら</sup>みようとし<sup>よしあきら</sup>なかつた上に、<sup>よしあきら</sup>頻りに<sup>よしあきら</sup>僭<sup>よしあきら</sup>上の<sup>よしあきら</sup>振<sup>よしあきら</sup>舞<sup>よしあきら</sup>い<sup>よしあきら</sup>をもした。これに<sup>よしあきら</sup>世間の<sup>よしあきら</sup>人々が<sup>よしあきら</sup>窃かに<sup>よしあきら</sup>不平を<sup>よしあきら</sup>懐いて<sup>よしあきら</sup>いる時でも<sup>よしあきら</sup>あつたので、<sup>よしあきら</sup>関東の<sup>よしあきら</sup>氏満は<sup>よしあきら</sup>義満を<sup>よしあきら</sup>除いて<sup>よしあきら</sup>自分が<sup>よしあきら</sup>将軍になろうと<sup>よしあきら</sup>野心を<sup>よしあきら</sup>抱き、<sup>よしあきら</sup>これを<sup>よしあきら</sup>執事の上<sup>よしあきら</sup>杉憲春に<sup>よしあきら</sup>謀った。

<sup>よしあきら</sup>憲春は<sup>よしあきら</sup>驚いて、<sup>よしあきら</sup>固く<sup>よしあきら</sup>諫めて<sup>よしあきら</sup>その<sup>よしあきら</sup>不<sup>よしあきら</sup>心得を<sup>よしあきら</sup>思い<sup>よしあきら</sup>止<sup>よしあきら</sup>まらせようとしたが、<sup>よしあきら</sup>氏満が<sup>よしあきら</sup>容易に<sup>よしあきら</sup>聴かないの<sup>よしあきら</sup>を見ると、<sup>よしあきら</sup>遂に<sup>よしあきら</sup>諫めの<sup>よしあきら</sup>書面を<sup>よしあきら</sup>残して<sup>よしあきら</sup>自殺した。そのために<sup>よしあきら</sup>氏満は<sup>よしあきら</sup>止むなく<sup>よしあきら</sup>野心を<sup>よしあきら</sup>抑えていたが、<sup>よしあきら</sup>義満に対する<sup>よしあきら</sup>不平は<sup>よしあきら</sup>遂に<sup>よしあきら</sup>死ぬまで<sup>よしあきら</sup>これを<sup>よしあきら</sup>捨て<sup>よしあきら</sup>なかつたといわれる。

### みつかね やしん 関東の満兼の野心

<sup>ごこまつ</sup>後小松天皇の<sup>うじみつ</sup>応永5年、<sup>みつかね</sup>すなわち<sup>みつかね</sup>金閼が出来た<sup>うじみつ</sup>翌年の11月に<sup>みつかね</sup>氏満は40才で<sup>みつかね</sup>亡くなり、子の<sup>みつかね</sup>満兼もまた<sup>よしあきら</sup>父と同じ<sup>よしあきら</sup>野心を<sup>よしあきら</sup>抱いて、その<sup>よしあきら</sup>翌年6月、<sup>よしあきら</sup>大内義弘が<sup>よしあきら</sup>和泉に<sup>よしあきら</sup>兵を<sup>よしあきら</sup>挙げて<sup>よしあきら</sup>幕府に<sup>よしあきら</sup>叛いた時には、<sup>よしあきら</sup>遥かに<sup>よしあきら</sup>これに<sup>よしあきら</sup>応<sup>よしあきら</sup>じて、<sup>よしあきら</sup>幕府を<sup>よしあきら</sup>助けるために<sup>よしあきら</sup>兵を<sup>よしあきら</sup>出すと<sup>よしあきら</sup>称して<sup>よしあきら</sup>鎌倉を<sup>よしあきら</sup>出<sup>よしあきら</sup>発した。しかしこの時は、<sup>よしあきら</sup>義満が<sup>よしあきら</sup>自ら<sup>よしあきら</sup>大内<sup>よしあきら</sup>義弘を<sup>よしあきら</sup>討<sup>よしあきら</sup>つて<sup>よしあきら</sup>これを<sup>よしあきら</sup>平らげたので、<sup>よしあきら</sup>満兼も<sup>よしあきら</sup>止むなく<sup>よしあきら</sup>引き返したので、<sup>よしあきら</sup>彼の<sup>よしあきら</sup>企ては<sup>よしあきら</sup>表には<sup>よしあきら</sup>現れず<sup>よしあきら</sup>に<sup>よしあきら</sup>済んだ。

### かんとくぼう 関東公方

<sup>みつかね</sup>満兼はその後も、<sup>よしあきら</sup>折があれば<sup>よしあきら</sup>義満に<sup>よしあきら</sup>代わって<sup>よしあきら</sup>将軍になろうと<sup>よしあきら</sup>心がけていたが、<sup>よしあきら</sup>ついにその<sup>よしあきら</sup>志<sup>よしあきら</sup>を<sup>よしあきら</sup>遂げる<sup>よしあきら</sup>時は<sup>よしあきら</sup>来<sup>よしあきら</sup>なかつた。けれども、<sup>よしあきら</sup>東国は<sup>よしあきら</sup>久しく<sup>よしあきら</sup>源氏の<sup>よしあきら</sup>勢力を<sup>よしあきら</sup>布いた<sup>よしあきら</sup>所で、<sup>よしあきら</sup>ことに<sup>よしあきら</sup>足利氏の<sup>よしあきら</sup>根<sup>よしあきら</sup>拠地<sup>よしあきら</sup>であるので、<sup>よしあきら</sup>既に<sup>よしあきら</sup>3代も<sup>よしあきら</sup>そこを<sup>よしあきら</sup>収めた<sup>よしあきら</sup>関東管領家の<sup>よしあきら</sup>威望は<sup>よしあきら</sup>非常に<sup>よしあきら</sup>盛ん<sup>よしあきら</sup>になって<sup>よしあきら</sup>来ていた。それで、<sup>よしあきら</sup>彼は<sup>よしあきら</sup>その<sup>よしあきら</sup>勢<sup>よしあきら</sup>いを<sup>よしあきら</sup>恃<sup>よしあきら</sup>んで、<sup>よしあきら</sup>だんだんと<sup>よしあきら</sup>幕府を<sup>よしあきら</sup>軽<sup>よしあきら</sup>んじ、<sup>よしあきら</sup>遂には<sup>よしあきら</sup>将軍になら<sup>よしあきら</sup>って<sup>よしあきら</sup>管領を<sup>よしあきら</sup>公方と<sup>よしあきら</sup>称し、<sup>よしあきら</sup>執事を<sup>よしあきら</sup>管領と呼<sup>よしあきら</sup>んで、<sup>よしあきら</sup>将軍<sup>よしあきら</sup>気<sup>よしあきら</sup>取り<sup>よしあきら</sup>でいたが、<sup>よしあきら</sup>応永16年、<sup>よしあきら</sup>即ち<sup>よしあきら</sup>義満が<sup>よしあきら</sup>薨じた<sup>よしあきら</sup>翌年の7月に<sup>よしあきら</sup>亡くなった。その後を<sup>よしあきら</sup>継いだ<sup>よしあきら</sup>のが<sup>よしあきら</sup>子の<sup>よしあきら</sup>足利<sup>よしあきら</sup>持<sup>よしあきら</sup>氏で、<sup>よしあきら</sup>即ち<sup>よしあきら</sup>後に<sup>よしあきら</sup>永<sup>よしあきら</sup>享<sup>よしあきら</sup>の<sup>よしあきら</sup>乱<sup>よしあきら</sup>を<sup>よしあきら</sup>起<sup>よしあきら</sup>こした<sup>よしあきら</sup>男<sup>よしあきら</sup>です。

## 第2話 関東管領と永享の乱

あしかがもちうじ  
足利持氏

持氏も又、父や祖父と同じく将軍になろうという野心を抱いて、窃かにその機会を狙っているうちにたまたま起こったのが、3代将軍の義量が亡くなった後の跡継ぎの問題です。義量にもその父の義持にも子が無かったし、義持の弟はみな坊さんになっていたのも、持氏は当然自分が将軍になれるものと思って喜んでいました。ところが、既に述べた通り、管領の畠山満家の取り計らいで、第102代花園天皇の永享元年に、僧の義円を還俗させて4代将軍義教としたために、持氏は当てが外れて不平に堪えず、その後は、「なんで還俗将軍に従うものか」といって、事毎に将軍の命令に反抗した。

幕府に取っては、最も大事な東国を治めている関東管領家がこの有様では大いに困る。それで、義教は、永享4年の9月、持氏の本心をも探り、東国の様子をも見るために、表面は富士山の見物と称して駿河に下った。ところが、普通ならば、本家の将軍がはるばると京都から下って来るのですから、関東管領は当然これを途中に出迎えてご機嫌をも伺うべきであるのに、持氏は鎌倉にいたまま病氣と称して義教に会おうともしなかった。

うえすぎのりざね  
執事上杉憲実

将軍義教は持氏の無礼に怒って京都に帰ったが、一方、鎌倉の執事の上杉憲実もまた、持氏の態度のよくないのを見て、しきりにその不心得を諫めた。しかし持氏は少しもこれを用いないばかりか、後には次第に憲実を憎んで、これを遠ざけるようにさえした。

けんおうまる げんぶく  
賢王丸の元服

こうして互いの感情が纏れて面白く無く過ごしているうちに、永享10年の春、持氏は嫡子の賢王丸が13才になったので元服させることにした。元服とは、男の子が成人して、始めてを衣服を大人仕立てのものに改め、髪を結って冠をかむる時に行う儀式で、この時、幼名を廃して大人の名を付けることになっています。ところが、これまで鎌倉の管領家で元服する時には、必ず京都の将軍から諱（訳注：貴人の実名）の1字を貰うのが例で、現に持氏の如きも将軍義持から持の1字を貰ったのでした。

然るに、持氏は義教を軽蔑していたので、賢王丸のためにその名の1字を貰うのを好まず、昔、先祖の義家が石清水八幡で元服した例を真似て、ついにその年の6月に、鶴岡八幡の神前にその式を行い、名を勝手に義久と付けた。

のりざね いんたい  
憲実の隠退

この時、上杉憲実はこれまでの例を引いて固く諫めたけれども、用いられなかったばかりか、彼が邸を出て行くのを待って持氏が殺そうとしているという噂なども立ったために、病氣と称して家に引き籠っていた。やがて又、持氏が兵を集めて憲実の家を攻めさせようとしているという風説を聞くと、ついに鎌倉を去って、彼の領地の上野に退いた。思うに、鎌倉にいて持氏の討手を受けて戦っては逆臣となるのを恐れて、遠くへ難を避けたのでしょう。

ところが、持氏はそれでも満足せずに、憲実を討ってこれを滅ぼそうと、自ら兵を率いて上野に向っ

## 第2話 関東管領と永享の乱

たので、**憲実**もこうなる上は仕方がないと思ったのか、急に使いを京都に馳せて事の次第を幕府に訴えた。

### 永享の乱

將軍の**義教**は、かねて関東の不穏な様子を聞いて、いつかはこういう時が来るであろうと思っていたので、少しも驚かずに朝廷に奏して、**持氏**追討の勅を受け、兵を發して鎌倉に向わせると共に、上杉**憲実**にも兵を出させた。**憲実**は**持氏**の先鋒を破って武蔵の分倍河原に進んできた。

この時、足利**持氏**の軍は既に幕府の軍にも打ち破られて、逆も前後の敵を防ぐことなどは出来なかったために、**持氏**は逃げて金沢（横浜南部）の称名寺に入り、出家して、上杉**憲実**に和睦を求めた。

**憲実**は使いを京都に遣わして、**持氏**の死を宥して子の**義久**に管領職を継がせるようにと願った。しかし、將軍**義教**はこれを許さず、**憲実**に厳命を伝えて、翌永享11年2月10日、ついに**持氏**に自殺せしめて、ついで**義久**も自殺させた。世にこれを永享の乱という。**基氏**以来およそ90年で関東管領家はここに亡びたのであります。

### 不幸な上杉憲実

この後、東国の実権は執事上杉氏の手に移ったが、しかし**憲実**自身は、たとえ幕府の命令であったとはいえ、主人に対して兵を差し向け、ついにこれを自殺させるに至ったのは、家来の道でないと、大いに恥じて、出家した。そして、**持氏**の廟所に詣り、その位牌の前で自殺しようとした。しかし家来の者に固く止められたので、その後は坊さんとなって諸国を巡り、遂に長門の深川村というところで死んだ。

不心得な主人を持ったために、彼もまた不幸な一生を送らなければならなかったのです。

（第2話 関東管領と永享の乱 終わり。次は前頁に戻り、第3話 嘉吉の乱とい幕府の衰微へ）